

Scroogeの改心の構造

木村英紀

1

たしかに、*A Christmas Carol*は強欲非道なScroogeが一夜にして善良で気前のよい"gentleman"に変貌を遂げるという寓話であり、「クリスマス精神」というべきものがあればまさにそれにふさわしいものである。たとえば、ディケンズの友人でもあり、有名な最初の伝記を書いたJohn Forsterは、次のように書いている。

There was indeed nobody that had not some interest in the message of the *Christmas Carol*. It told the selfish man to rid himself of selfishness; the just man to make himself generous; and the good-natured man to enlarge the sphere of his good nature. Its cheery voice of faith and hope, ringing from one end of the island to the other, carried pleasant warning alike to all, that if the duties of Christmas were wanting no good could come of its outward observances; that it must shine upon the cold hearth and warm it, and into the sorrowful heart and comfort it; that it must be kindness, benevolence, charity, mercy, and forbearance, or its plum pudding would turn to bile, and its roast beef be indigestible. Nor could any man have said it with the same appropriateness as Dickens.¹⁾

また、ディケンズのライバルともみなされたWilliam Makepeace Thackeray も次のようにこの作品への賞賛の言葉を述べている。"Who can listen to objections regarding such a book as this [*A Christmas Carol*]? It seems to me a national benefit, and to every man or woman who reads it a personal kindness."²⁾ 同時代の人々の言うとおり、この作品は傑作であり、発表されたときから今に至るまで読み継がれ、何度も映画化されたり、舞台でも上演されてきた。³⁾ この作品がある種の永続性を持っているのは、すぐれた寓話のもつ生命力によることは確かである。しかし、それ以上に、ディケンズが自らの芸術的想像力とこの時点での彼の創作技法のすべてを注ぎ込んだために、表現や内容と構成と

いう点できわめて密度の高い作品となっているからだと言った方がむしろ適切であろう。（彼の原稿は推敲に推敲を重ねたため、判読するのがやっとという状態である。^{4）}）

あるいは、Peter Ackroydは、次のように書いている。

Most importantly, he[Dickens] had for the first time been able to complete an entire fiction without being compelled to write in serial portions. He had had the opportunity to design the book in every sense and carefully to calculate the plot in advance.^{5）}

この指摘は重要であるが、この作品が普遍的な人間性への洞察を幾重にも可能にするだけの、さまざまな「読み」の可能性をもつ作品だという点をも付け加えるべきではなかろうか。

この小論では、従来多くの批評家が述べてきたような、「ユーモアにあふれた完璧な道徳的寓話」という評価を越えて^{6）}、この作品が本来的に有している「深み」について考察を試みてみたいと思う。

2

まず、スクルージがマーレイの幽霊と出会う場面を考えてみたい。この場面は実に綿密に構成されており、スクルージの心理が見事に表現されている。すなわち、マーレイの幽霊に仮託された、自らの「存在の現実」と正面から向き合うことへの恐怖という心理である。鉄製の帳簿やら金庫、財布などが付いている重く長い鎖を体に巻き付けたマーレイの幽霊の姿はグロテスクであるが、その醜い姿はスクルージの現実生活そのものでもある。スクルージは、自らの現実の姿との対面をつねに意識下で抑圧してきたのだが、まるで鏡を覗き込むように、マーレイの幽霊のなかに自分自身の醜い姿を見なければならなくなるのである。そして、自分の現実の姿を見ることは、現実の否定へと繋がっていかざるをえない。だからこそ、スクルージはマーレイの幽霊の存在を認めることができないのである。こうしたスクルージの心理の過程を少し詳しく見てみることにする。

スクルージが他に誰も住んでいないわびしい家に仕事から帰ってきて、ドアを開けようとすると、ドアのノッカーが7年前のクリスマス・イヴ

に死んだマーレイの顔に見える。そのとき彼は一瞬の恐怖を感じ、家の中に入るとドアの内側にマーレイの"pigtail"が突き出ていないかどうか確かめる。そこには何もないので、"Pooh! Pooh!"といいながらドアを閉める。すると、その音が「雷」のように家の中全体に響きわたり、しかも、"a locomotive hearse"が自分の前を歩いていくのが見えたような気がする。それでも、スクルージは、いつものように蠟燭をケチりながら階段を上がって部屋に入っていく。決して明るくして事実を確かめようとはしないのである。

Up Scrooge went, not caring a button for that. Darkness is cheap, and Scrooge liked it. But before he shut his heavy door, he walked through his rooms to see that all was right. He had just enough recollections of the face [of Marley] to desire to do that.⁷⁾

これは、スクルージの徹底したケチぶりに対するユーモラスな表現ではあるが、マーレイの幽霊の存在を否定したいという願望とマーレイの幽霊が本当にいるのではないかという不安と恐怖が混在している、スクルージの心理の表現でもある。

しかし、混在してはいても、スクルージの心理を支配しているのは、マーレイの幽霊を否定したいという願望であり、それは彼が部屋に入ってから起こるさまざまな怪異現象に遭遇しても変わることがない。不安と恐怖を抑圧し、虚勢を張るスクルージの心理過程は、寓話という枠組みのなかでは最大限の「現実性」(verisimilitude)で描かれことになる。この意味では、「ノッカーがマーレイの顔に見えたという、この些細な一件を契機に、あれほど冷酷無感動なはずのスクルージが、まるで音をたてるかのようにガタガタと崩壊しはじめるのである。」という田辺昌美氏の理解は、この場面におけるスクルージの心理的葛藤を無視した、かなり皮相な見方だと言わざるをえない。⁸⁾氏の言うほどこの過程は、単純で直線的な構成にはなっていないのである。

マーレイの幽霊がいることを示す超自然的な現象が起こる度に、スクルージの反応は両義的である。今では使われていない彼の部屋のベルが揺れ始め、それを始めに家中のベルが鳴り出しても、また地下の貯蔵庫から重い鎖を引きずる音が聞こえ、それがだんだん彼の部屋に近づいて来ても、スクルージは、「ばかばかしい！信じるものか」("It's humbug

still!' said Scrooge. 'I won't believe it.'"(17)) と言う。そしてとうとうドアが開いて、マーレイの幽霊が目の前に現れても、その幽霊の姿をじつくりと観察した後で、「それでもスクルージは信じようとせず、自分の感覚がおかしいのだと思おうとした」 ("he was still incredulous, and fought against his senses."(18))。したがって、マーレイの幽霊に「おまえは俺の存在を信じられないようだな」と言われても、「信じられんね」と答えるのである。無論、スクルージが恐怖を感じていないわけではない。彼が、幽霊に向かって、「お前は、未消化の牛肉の切れ端か、マスタードのしみか、チーズのくず、あるいは生煮えのジャガイモのかけらかもしれんな。お前がどういう存在にしる、墓よりも肉汁の気が多そうじゃ。」 ("You may be an undigested bit of beef, a blot of mustard, a crumb of cheese, a fragment of an underdone potato. There's more of gravy than of grave about you, whatever you are!"(19)) などと、冗談めかしたことを言うのも、恐怖心を何とか抑えたいがためである。

Scrooge was not much in the habit of cracking jokes, nor did he feel, in his heart, by any means waggish then. The truth is, that he tried to be smart, as a means of distracting his own attention, and keeping down his terror; for the spectre's voice disturbed the very marrow in his bones. (19)

さらに、スクルージはマーレイに向かって、爪楊枝を飲み込むと、逆に脅しをかける。 "'I have but to swallow this [toothpick], and be for the rest of my days persecuted by a legion of goblins, all of my own creation. Humbug, I tell you, humbug!'"(19) これを聞いたマーレイは、最後の手段に訴えざるを得なくなる。頭から顎に縦に結んである包帯を取ると、下顎が胸の所までがくんと垂れ落ちる恐ろしい姿をスクルージに見せるのである。ここに至って、恐怖の極限に達したスクルージは、マーレイの幽霊の存在を認めざるを得なくなるのである。

スクルージが、これほど頑なにマーレイの幽霊の存在を認めようとしなかったのは、前にも述べたように、スクルージの存在に関わる根元的な問いをマーレイが突きつけたからである。スクルージは、言うまでもなく資本主義社会の勝利者である。しかも、彼は徒弟奉公人の身から、自らの才覚だけでのし上がった成功者である。マックス・ウェーバーを持ち出すまでもないが、合理性、計算可能性、計量可能性をその存立条

件とする社会で生きるということ、さらにそこで成功を収めるということとは、自らの生をそれに適合させてきたということであり、その結果として、スクルージは"counting-house"の主となることができたのである。もちろん、スクルージは一個の戯画であり、作品の冒頭で次のように描かれる。

Oh! but he was a tight-fisted hand at the grindstone. Scrooge! a squeezing, wrenching, grasping, scraping, clutching, covetous, old sinner! Hard and sharp as flint, from which no steel had ever struck out generous fire; secret, and self-contained, and solitary as an oyster. (6)

否定的な形容詞の氾濫する過剰な表現であり、直喩のあまりの直接性も戯画的である。では、マーレイはどうか。マーレイは、スクルージの共同経営者であり、生きているときはスクルージと全く同一の人間であった。だから、マーレイが死んだ後も、スクルージは事務所の"Scrooge and Marley"という看板からマーレイの名前を消さなかった。二人は完全に置き換え可能な存在なのである。

そのマーレイが幽霊となってスクルージの前に現れたのである。それは、スクルージの未来の姿を明確に示すものであるだけでなく、スクルージが生きている世界を根底から覆すものである。つまり、マーレイの幽霊は、スクルージの生の否定的契機だということになる。マーレイの幽霊はこう語る。

'Business!' cried the Ghost, wringing its hands again. 'Mankind was my business. The common welfare was my business; charity, mercy, forbearance, and benevolence, were all my business. The dealings of my trade were but a drop of water in the comprehensive ocean of my business!' (21-22)

まさにスクルージの存在理由の根本的否定である。スクルージは長い年月「商売上の取り引き」に全精力をつぎ込んできたが、それが「大海の一滴」にすぎないのであれば、彼の人生には一体何の意味があるのか。だからこそ、スクルージは必死に恐怖心と闘いながら、マーレイの幽霊の存在に抵抗しようとしたのである。しかし、その抵抗は無駄であった。

スクルージは、マーレイの幽霊のグロテスクな姿を見ることで、自らのグロテスクな現実と向き合わなければならなくなるのである。

3

過去という問題はこの作品の重要なモチーフであり、ディケンズが創り上げた「過去のクリスマスの精霊」("the Ghost of Christmas Past")は、実に興味深く描かれている。まず、この幽霊の姿のすべてが矛盾している。

It[the Ghost] was a strange figure -- like a child: yet not so like a child as like an old man, viewed through some supernatural medium, which gave him the appearance of having receded from the view, and being diminished to a child's proportions. Its hair, which hung about its neck and down its back, was white as if with age; and yet the face had not a wrinkle in it, and the tenderest bloom was on the skin. The arms were very long and muscular; the hands the same, as if its hold were of uncommon strength. Its legs and feet, most delicately formed, were, like those upper members, bare.... It held a branch of fresh green holly in its hand; and, in singular contradiction of that wintry emblem, had its dress trimmed with summer flowers. (27)

つまり、child/old man、white hair/tenderest bloom on the skin、long and muscular arms/delicately formed legs and feet、fresh winter holly/summer flowersという対照・対立・矛盾なのである。

また、頭からは眩しいほどのはっきりした光を放っているが、さらに奇妙なところは、暗闇の中でそのベルトの明滅によって精霊の体のある部分が見えたり見えなかったりすることで、きわめて不可思議な姿となることである。

For as its belt sparkled and glittered now in one part and now in another, and what was light one instant, at another time was dark, so the figure itself fluctuated in its distinctness: being now a thing with one arm, now with one leg, now with twenty legs, now a pair of legs without a head, now a head without a body: of which

dissolving parts, no outline would be visible in the dense gloom wherein they melted away. And in the very wonder of this, it would be itself again, distinct and clear as ever. (27)

こうしてみると、マーレイの幽霊や他の二人の精霊の挿し絵があるのに、この精霊を描いた挿し絵がないのも頷ける。描きようがないのだ。この過去の精霊の描写については、Malcolm Andrewsが示唆に富む解釈を与えている。

It[the Ghost of Christmas Past] is the indistinct emblem of memory, the disconcerting embodiment of all ages and any age.... Memory imaged like this is unstable, disturbing, dreamlike in its weird, random mutations. The Ghost is an extraordinarily appropriate creation, given the role it has to play in the story of redemption.⁹⁾

たしかに、過去の姿は、曖昧に変化し続ける。この意味では、"the figure itself fluctuated in its distinctness"という表現は、象徴的であり、示唆的である。われわれの多くは、自分の過去の記憶について、きわめて曖昧なものしか持たないし、ある時にはもっともはっきりと覚えている印象的な出来事が年を経るとさほどの感慨も湧かないものになってしまうこともあるし、あるいは出来事の時間的な脈絡や前後関係すら怪しい場合もある。また、誇張もあれば、意識的な忘却もある。そして、過去の記憶についてもっとも決定的なことは、ある出来事に対する解釈が時間の経過とともに変化するということであろう。いわば、自分の過去とは自分にとって「合理的」に解釈された断片から成る「物語」であると言ってもいいかもしれない。

しかし、スクルージは自らの「物語」を持つことすら拒絶した人間だった。すなわち、彼は自らの過去を断ち切ってしまったまま、現在のみ、現在の非人間的な商売にのみ生きる人間となったのである。であればこそ、過去の精霊が強制的にスクルージを過去の世界に連れていくというこの作品の構成に重要な意味がある。

この作品の中では、しかし、過去の精霊がスクルージに「過去の影」("shadows of the things that have been"(30))を見せるという設定になっており、スクルージが自分で苦労して記憶を辿るということにはなっていない。したがって、彼の過去には曖昧なところは全くないし、映画

でも見るように、細部まで正確な自分の過去の世界を見ていくなかで徐々に彼の記憶に対する感覚が研ぎすまされていくということになる。だから、"He was conscious of a thousand odours floating in the air, each one connected with a thousand thoughts, and hopes, and joys, and cares long, long, forgotten!"ということになるし(29)、また、"Strange to have forgotten it for so many years!" と精霊に皮肉られても意に介さない。これこそが、リアリズム小説の枠組では不可能な仕掛けであり、寓話のもつ特権的な駆動装置であると言える。ディケンズは、すでに見たように、過去あるいは記憶の持つ複雑な問題性を過去の精霊の描写によって表現する一方で、スクルージがいともたやすく自らの過去の世界に入っていけるような仕組みを作ることに成功したことになる。

ここで、少し詳しくスクルージの過去との対面を見ていくことにしたい。スクルージが最初に見せられるのは、幼少期の孤独な自分の姿である。幼少期の彼は、クリスマス・イヴに生徒たちが皆我が家へと帰った後の人気のない学校で、一人ぼっちで本の世界で遊んでいる。そういう幼かった頃の自分を見て、スクルージのなかに熱いものが込み上げてくる。("a lonely boy was reading near a feeble fire; and Scrooge sat down upon a form, and wept to see his poor forgotten self as he used to be."(30-31)) そして、今のスクルージにも、昔は見た本の世界の人物たちが見えるのである。

'Why, It's Ali Baba!' Scrooge exclaimed in ecstasy. 'It's dear old honest Ali Baba! Yes, yes, I know! One Christmas time, when yonder solitary child was left here all alone, he did come, for the first time, just like that. Poor boy!' (31)

今まで意識の底に固く封印していた過去の辛い思い出が、再びスクルージの意識のなかに甦ってくるとともに、彼の閉ざされた心が氷解したかのようである。これを、Dickensian sentimentalism として片付けるのはたやすい。しかし、人の個人史のなかでもっとも不可解で、なおかつその細部を思い出せないのは幼少期の記憶ではあるまいか。大人になってから、その頃の自分をスクルージのように見てみたいと思うのは、ごく少数の人間だけであろうか。この場面がセンチメンタルなものだとしても、それはもっとも良質な部類のセンチメンタリズムであり、ディケンズはここで読む者の琴線に触れるような普遍的な何かを表現できたのだと思

われる。

さて、スクルージは自らの孤独な幼少期の記憶を回復することで、他者への想像力をも回復させていくことになる。彼は、精霊に次のように語る。"There was a boy singing a Christmas Carol at my door last night. I should like to have given him something: that's all." (32) 自己憐憫が、他者への憐れみへと繋がり、過去が現在に繋がっていくのである。

この構造は、次の過去の場面でも同じである。ここでは、スクルージは寄宿学校の少年となっているが、他の生徒たちがクリスマス休暇で家に帰ったため一人寄宿舎に残されて、絶望的な表情を浮かべて部屋のなかを歩き回っている。そこに妹のファンが迎えに来るのである。兄への愛情を満面に湛えて彼女は言う。

'Home, for good and all. Home, for ever and ever. Father is so much kinder than he used to be, that home's like Heaven. He spoke so gently to me one dear night when I was going to bed, that I was not afraid to ask him once more if you might come home; and he said Yes, you should; and sent me in a coach to bring you. And you're to be a man!' (32-33)

この記憶が、スクルージに若くして死んだ妹への愛情を甦らせ、そして彼女の一人息子であり、彼にとっては唯一の身内であるフレッドへの思いへと繋がっていく。その思いには、前の日にクリスマスの祝いを述べ、食事の招待にやって来たフレッドに対して、冷淡で傲慢な態度を取ったことへの苦い思いが重なるのである。

次に見せられる過去のクリスマスは、スクルージが老フェジウィックの店で徒弟奉公をしていたときのもので、贅沢ではないが、心の通い合う人々が集って陽気に浮かれ騒ぐ家庭舞踏会の様子が詳細に映し出される。それを見たスクルージは、「ほとんど気の触れたような状態となり、心も魂もその情景にのみ込まれ、昔の自分に戻っていた。」 ("During the whole of this time, Scrooge had acted like a man out of his wits. His heart and soul were in the scene, and with his former self.(37)) このようなスクルージを傍らで見ている「精霊の頭からでる光は煌々と輝く」のである ("the light upon its head burnt very clear.(37)) が、一方でスクルージを挑発するように、「たかだか3、4ポンドしか遣っていないあの主人がそれほどの賞賛に値するものなのかね」と彼に言う

("[Fezziwick] has spent but a few pounds of your mortal money: three or four perhaps. Is that so much that he deserves this praise?"(37))。それに対して、スクルージは思わず次のように答えてしまう。

'It isn't that, Spirit. He has the power to render us happy or unhappy; to make our service light or burdensome; a pleasure or a toil. Say that his power lies in words and looks, in things so slight and insignificant that it is impossible to add and count 'em up: what then? The happiness he gives, is quite as great as if it cost a fortune.' (37-38)

このように言うスクルージは、またも現実に引き戻され、自分が安い賃金で酷使している事務員のボブ・クラチットのことを思わないわけにはいかなくなるのである。

第4の過去の情景は、青年期のスクルージが婚約者のベルと別れる場面である。この頃の彼は、すでに、気苦労と貪欲の兆候を帯び始めており、がつがつとした貪欲さが表れていた。自分に対する情熱や愛情よりも金という偶像に支配されていると、ベルが責めるのに対して、スクルージは、「貧乏に対してほど世間が辛くあたるものはないのに、富を追い求めようとすればそのことも厳しく非難するのだ」("There is nothing on which [the world] is so hard as poverty; and there is nothing it professes to condemn with such severity as the pursuit of the wealth"(38))と抗弁する。ここには一面の真理はあるものの、愛情や慈悲のない「富の追求」は、所詮は、人間性を喪失した守銭奴への道である。ベルは、その本質を突く。

'All your other hopes have merged into the hope of being beyond the chance of its[the world's] sordid reproach. I have seen your nobler aspirations fall off one by one, until the master-passion, Gain, engross you. Have I not?' (38-39)

この場面は、スクルージの人生の決定的な岐路である。これは、後の *Great Expectations* において、Pipが"fellow-sufferer"であり"the second father"であるJoeを捨て去ったことと比較しうるような、決定的な出来事である。¹⁰⁾ 幼年期からの過去の間を見せられてきたスクルージには、

この別離がどれほど自分にとって重要なものだったのかが分かったはずである。そうであればこそ、精霊に向かって「もうこれ以上見せてくるな！」と叫ばざるをえないのである。

'Spirit!' said Scrooge, 'Show me no more! Conduct me home. Why do you delight to torture me?'

'One shadow more!' exclaimed the Ghost.

'No more!' cried Scrooge. 'No more I don't wish to see it. Show me no more!' (40)

この場面は、マクベスが魔女に次から次へとバンクオーの子孫が王冠をつけて出てくる情景を見せられて叫ぶ場面にも例えられようか。 11)
ともあれ、スクルージの苦悶は耐え難いほどになるが、しかし精霊は、それ以上の辛い情景をスクルージに見せつけるのである。

この情景は、スクルージ自身の過去ではないが、マーレイが死んだ7年前のクリスマス・イヴにおけるベルの家庭の情景である。それは、裕福ではないものの、暖かさに満ちた、幸福を絵に描いたような家庭であり、スクルージが実現しようと思えば実現できた、もう一つの人生の選択肢であった。だからこそ、スクルージは次のように感じるのである。

And now Scrooge looked on more attentively than ever, when the master of the house, having his daughter leaning fondly on him, sat down with her and her mother[Belle] at his own fireside; and when he thought that such another creature, quite as graceful and as full of promise, might have called him father, and been a spring time in the haggard winter of his life, his sight grew very dim indeed. (41-42)

彼の涙が後悔の涙であることは言うまでもない。この情景を見ることで、現在の自分の孤独な生活がいかに惨めなものであるか、そしてそれはベルと別れて、守銭奴への道を歩いてきたことの結末であることを思い知らされるのである。そのことは、前の場面にもまして、彼の心理的限界を超えた、文字通り耐え難いほどのものであった。それで、彼は何としてもその場を逃れようとして精霊に飛びかかる。この場面は簡潔ではあるが、スクルージの心理的リアリティーがきわめて象徴的に描かれてい

る場面でもある。精霊の顔は、それまでに見てきた人々の顔の断片が入り混じった顔になり、スクルージが精霊と格闘しても、精霊の方は何の抵抗もしないが、さりとて少しもダメージを受けない。それどころか、精霊の頭から出る光は、煌々と輝くばかりである。スクルージは、その光が自分に影響を与えていると思い、精霊の持っていた「消灯帽」("the extinguisher-cap")を精霊の頭に押しつける。

The Spirit dropped beneath it, so that the extinguisher covered its whole form; but though Scrooge pressed it down with all his force, he could not hide the light, which streamed from under it, in an unbroken flood upon the ground. (42-43)

この消灯帽は、スクルージのような人間の欲望が作りあげたものであって、過去を抑圧する心理的機制の象徴でもある。つまり、過去を抑圧することが欲望の肥大化へと繋がるのである。とすれば、精霊の「光」は、過去を映し出す光であるが、スクルージに幸福("welfare")を与え、更生させる("reclamation")光でもある。だから、精霊が現れたとき、スクルージが精霊に消灯帽をかぶってみてくれないかと言うと、精霊は怒りを露わにしたのである。

'What!' exclaimed the Ghost, 'would you so soon put out, with worldly hands, the light I give? Is it not enough that you are one of those whose passions made this cap, and force me through whole trains of years to wear it low upon my brow!' (28)

したがって、先に引用したこの章の最後の場面で、スクルージが精霊の全身を消灯帽で覆っても光が消えずに、消灯帽の下から光が絶え間なくふんだんに流れ出すという描写は、スクルージの過去が消せないということよりも、むしろ彼の更生の希望が消えていないということを象徴的に表現してしていると言えよう。

これまで見てきたように、スクルージは5つの過去の情景を見せられるが、その情景すべてが自らの現実の生活と行動への悔悟を彼に強制する。

それは、長く抑圧してきた過去の記憶の回復が人間性の回復をもたらすという、この作品の根本的テーマでもある。この点について、James E. Marlow の次の指摘は実に的確である。

Long before Breuer and Freud's "talking cure," Dickens suggested that only by recalling the past -- both happy and unhappy -- can disarm it and gain freedom. The past must be subject to present discourse; but the present is also subject to the past -- with mutual, continuous looping effects.... The decisive step for Dickens here was to admit that the past can be a force for life -- that to confront memories is a movement towards freedom, an emancipation into the full present.^{1 2)}

精神分析においては、患者が自分の過去を書いたり、治療者に話したりする療法がある。それをきわめて単純な形で言うならば、現在の病的苦悩の原因となった過去の傷を自らが試行錯誤を重ねながら発見し、治療者の援助を受けながら自らの手でそれを克服することで、現在の病を癒そうとする療法である。いわば、自らの意識の深層を探る試みが、癒しへと繋がっていくのである。これと同様に、スクルージの過去への旅は、過去と真剣に向き合い、対決することで、喜びや悲哀や痛烈な痛みなどのさまざまな感情を伴いながらも、抑圧してきた過去の呪縛から解放たれるという構造になっている。そして、それが現在の自分の精神の解放をもたらすのである。^{1 3)} ディケンズがフロイトの精神分析理論を知る由もなかったことは言うまでもないが、この第2章でのスクルージの心理的葛藤の過程は、フロイト理論の核心の一つを見事に文学的に表現したものであると言える。^{1 4)}

しかし、スクルージの場合、過去の記憶の回復だけでは、完全な人間性の回復はなされえない。スクルージの守銭奴としての存在はたんなる個人的な性格を越えて、社会的な性格を持っているからだ。すなわち、強欲非道な資本家としての彼は、金の支配力によって、また利益（Gain）の追求の過程で、多くの人間を呪縛し傷つけてきたはずである。すでに見たように、彼の元を去った婚約者のベルも彼に傷つけられた一人であろうし、彼の元で働いているボブ・クラチットも、日々の労働において薄給で酷使されていると言ってもよいだろう。この点に関しては第5章

に印象的な場面がある。スクルージの死によって唯一救われるのが、彼から金を借りていた夫婦だけだったという場面である。

'We are quite ruined?'

'No. There is hope yet, Caroline.'

'If he *relents*,' she said, amazed, 'there is! Nothing is past hope, if such a miracle has happened.'

'He is past relenting,' said her husband. 'He is dead.'

She was a mild and patient creature if her face spoke truth; but she was thankful in her soul to hear it, and she said so, with clasped hands. She prayed forgiveness the next moment and was sorry; but the first was the emotion of her heart. (78)

こうして見ると、スクルージは、金銭関係 ("Cash-nexus") だけが人間関係の唯一の絆であるような社会に生きる「経済人の化身」だということになる。¹⁵⁾ だとすれば、スクルージの現実の存在を変えなければ、彼の悔悟は本物だとは言えない。そこに「現在のクリスマスの精霊」 ("the Ghost of Christmas Present") と「未来のクリスマスの精霊」 ("the Ghost of Christmas Yet To Come") に残された役割がある。この問題を考えることは、この作品の構造の複雑さと深みを考えることになる。

過去に向き合うことで改心への道を歩き始めたと思っているスクルージは、現在の精霊が出現すると、次のように言う。

'Spirit,' said Scrooge submissively, 'conduct me where you will.

I went forth last night on compulsion, and I learnt *a lesson which is working now*. To-night, if you have aught to teach me, let me profit by it.' (47: my Italics)

過去の精霊から「教訓を学び、それが今私の中で生きているのです」と言うスクルージは、第1章の前半で描かれた守銭奴のスクルージとは全くの別人のようである。そして「何か私に教えて下さるものがあるのでしたら、私のためになるようにしてください」と言うスクルージの、老獪な守銭奴からの変貌ぶりにはどこか滑稽さがあり、あまりにも安易な「悔悛」という印象を拭いがたい。それは、前に論じた、スクルージの過去の記憶と悔悟との関係を考えるならば、作品の構成自体を壊しかね

ないほどの齟齬である。しかし、ここにこそ、ディケンズの周到なプロット上の「罫」があり、そのために、現在のクリスマスの精霊が必要なのである。ディケンズはそれほど簡単にはスクルージを許しはしない。それは単にプロットの組み立てから要請されたものではなく、人間の心理現象からの論理的帰結と考えなくてはならないであろう。

すなわち、自らの過去と向き合うことによって他者の生活を思いやる想像力を獲得したスクルージは、今度は、現実と真摯に向き合わなくてはならないのである。そのために、ディケンズは、他者の生活を実際に見ることでスクルージに現実を直視する力を獲得させるという構成にしたのである。同時にそれは、第1章のマーレイの幽霊の言葉とも見事に照応する形となっている。マーレイの幽霊はスクルージに語る。

'It is required of every man,' the Ghost returned, 'that the spirit within him should walk abroad among his fellow-men, and travel far and wide; and if that spirit goes not forth in life, it is condemned to do so after death. It is doomed to wander through the world -- oh, woe is me! -- and witness what it cannot share, but might have shared on earth, and turned to happiness!' (20)

マーレイの巡礼は「世の中を歩き回る」ことであり、聖地は哀れな人々の生活である。この言葉に応えるかのように、精霊はスクルージにさまざまな人々のクリスマスの情景を見せるのであるが、いわば、スクルージもまた精霊によって強制された形ではあるが、一個の巡礼者になったとも言える。そして、聖地は、貴族やブルジョアジーの豪勢なクリスマスの宴会や舞踏会ではなく、マーレイと同じように、貧しい庶民のクリスマスである。ご馳走を焼くオーブンがないためパン屋のオーブンで焼いてもらおうと行列を作る人々や、荒涼とした土地で働く炭坑夫の家、暗礁に立つ灯台守、沖に出ている船の乗組員たち。こうした人々が、貧しくともクリスマスを祝う光景をスクルージは見せられるのである。

Much they saw, and far they went, and many homes they visited, but always with a happy end. The Spirit stood beside sick beds, and they were cheerful; on foreign lands, and they were close at home; by struggling men, and they were patient in their greater hope; by poverty, and it was rich. In almshouse, hospital, and jail,

in misery's every refuge, where vain man in his little brief
authority had not made fast the door, and barred the Spirit out, he
left his blessing, and taught Scrooge his precepts.¹⁶⁾ (65-66)

こうしてマーレイの幽霊が7年もの間さまよえる巡礼として広く世間を旅することを強制されているのに対して、スクルージは一晩の間に、精霊に導かれて「巡礼の旅」をすることになる。その過程で、それまでの彼の拠り所であった功利主義的な観点からは切り捨てられたものを一つ一つ見ていくことになり、その結果スクルージの功利主義が根底から覆されることになるのである。

そうした「旅」のなかでも、スクルージの事務員であるクラチット家の光景の描写は見事である。それは詳細に描かれており、そのことは、小池滋氏の、「心温まる情景を成功させるか否かの鍵は、文字通り表現に使用した単語の量、つまりディケンズの消費したインクと紙の量である」という指摘が正しいことを裏付けるかのようである。¹⁷⁾ そのごく一部を引用してみよう。

At last the dishes were set on, and grace was said.... and even Tiny Tim, excited by the two young Cratchits, beat on the table with the handle of his knife, and feebly cried Hurrah!

There never was such a goose. Bob said he didn't believe there ever was such a goose cooked. Its tenderness and flavour, size and cheapness, were the themes of universal admiration. Eked out by apple-sauce and mashed potatoes, it was a sufficient dinner for the whole family; indeed, as Mrs. Cratchit said with great delight (surveying one small atom of a bone upon the dish), they hadn't ate it all at last! Yet every one had had enough, and the youngest Cratchits in particular, were steeped in sage and onion to the eyebrows! (54)

子供が5人もいる家族にしては、量的にも質的にもまことにつつましい「ご馳走」という他ないが、ここには、調理の過程や料理の描写に出てくる湯気以上の暖かさが行間から溢れ出している。それは、"main dish"の後の、クリスマス・プディングの場面で最高潮に達する。

Everybody had something to say about [the pudding], but nobody said or thought it was at all a small pudding for a large family. It would have been flat *heresy* to do so. Any Cratchit would have blushed to hint at such thing. (54-55: my Italics)

現実の "a small pudding" をそのままの現実として認めることが「異端」であるような家庭は、互いを思いやる善意に満ちた世界であり、それが一種の理想像として描かれている。¹⁸⁾そこに、ディケンズの sentimental-ity をみることは容易であり、ある種の偽善をみることもできるであろう。わけでも、ボブが、クラチット家にとって "the Ogre of the family" であるスクルージのために乾杯を促す場面は、人によっては噴飯ものであろう。(この作品の出版の2年後の1845年にエンゲルスの『イギリス労働者階級の状態』が出版されたことを思えばなおさらのことである。)しかし、そうしたボブの素朴で善意の固まりのような性格と、彼が作った家庭を抜きにしては、この作品の構成は破綻をきたすことになる。(ボブがその頃の一大労働運動であった、Chartism の闘士であるような設定は考えにくい。)

ともあれ、スクルージは自分の雇っている人間の实生活がいかなるものかを直視させられるが、彼のすることはひたすら見ることに、そしてその現実からものを考えることである。8頁にわたるクラチット家のクリスマスの光景の描写の中でスクルージの描写は半頁ほどである。彼はひたすらこの光景を凝視するのであり、ボブの家を去るときにも、「スクルージは最後まで彼らを見つめていた、とくにチビのティムをじっと見つめ」るのである ("Scrooge had his eye upon them, and especially on Tiny Tim, until the last." (57))。

彼の見た中でもとりわけ彼の心を揺り動かすのが、病身で松葉杖で歩くティムの存在である。彼は、ティムの行く末が心配になり、「あの子が生きられるかどうか」精霊に尋ねるが、精霊は、ティムはやがて死ぬし、未来の精霊が変えない限りその運命は変えられないと答える。そして、 "'What then? If he be like to die, he had better do it, and decrease the surplus population.'" (55) と、スクルージが困窮者のために募金を集めに来た紳士たちに言った言葉 ("If [poor people] would rather die ... they had better do it, and decrease the surplus population." (11-12)) をそのまま返すのである。これを聞いたスクルージは、うなだれて、後悔と

深い悲しみの念で一杯になる ("Scrooge hung his head to hear his own words quoted by the Spirit, and was overcome with penitence and grief." (55)) さらに、精霊の訓戒は続く。

'Man,' said the Ghost, 'if man you be in heart, not adamant, forbear that wicked cant until you have discovered What the surplus is, and Where it is. Will you decide what men shall live, what men shall die? It may be, that in the sight of Heaven, you are more worthless and less fit to live than millions like this poor man's child. Oh God! to hear the Insect on the leaf pronouncing on the too much life among his hungry brothers in the dust.' (56)

これが、Thomas Robert Malthus の *Essay on Population* 『人口論』 (1798 : 1803) への批判であることは言うまでもない。¹⁹⁾

さらに第3章の最後で、精霊が別れ際に、「無知」と「欠乏」という名の、見るも惨めな二人の子供を自分のローブから出してスクルージに見せる、有名な場面がある。この怪物のような子供を見せられて、かろうじて「あなたの子供か」と問うスクルージに対して精霊は言う。

'They are Man's,' said the Spirit, looking down upon them. 'And they cling to me, appealing from their fathers. This boy is Ignorance. This girl is Want. Beware them both, and all of their degree, but most of all beware this boy, for on his brow I see that written which is Doom, unless the writing be erased. Deny it!' cried the Spirit, stretching out its hand towards the city. (67)

そして、この子たちには逃れる場所とか援助する人はいないのかと問うスクルージに対して、精霊はまたもスクルージが第1章で言った言葉 ("Are there no prisons? Are there no workhouses?" (11)) をそのまま投げかけて去るのである。

ほんの少し前まで、甥のフレッドのクリスマス・パーティーを覗いて、この上なく愉快的な経験をし、クリスマスの楽しさを満喫したスクルージにとっては、冷や水を浴びせかけられた思いであっただろう。「飢餓の40年代」と言われるこの時代、そして産業資本主義が無慈悲に労働者を虐待していたこの時代には、貧しい人間は、一步道を間違うとその家族とともに飢餓線上をさまよわねばならなかったし、監獄や救貧院への収

容はごく日常的だったことを想起しなければならない。Phillip Collinsは、この無知と欠乏という子供は、「おそらく一か月ぐらい前に目にした貧民学校の生徒の記憶に基づいているのであろう」と指摘している。²⁰⁾ 貧しい子供たちは教育も満足に受けられない現実があったのであり、無知は子供を犯罪へと追いやり、その結果その個人だけでなく社会もまた長期的に見れば「破滅」するというのがディケンズの信念だった。²¹⁾ 救貧院育ちのOliver Twistは、FaginやSikesの仲間に入れられそうになっても、「慈悲深い紳士」の助けで無垢のままでいられたが、多くの同じ境遇に置かれた子供たちが犯罪者となったというのも現実であろう。だからこそ、精霊は、「否定できるものなら否定してみろ」と、手をロンドンの方に向けるのである。そして、スクルージは、そのような社会を作った責任が自分にもあることを思い知らされるのである。

5

このように現実を直視させられたスクルージは、これまでの守銭奴的資本家としての存在を完膚無きまでに否定され、もうほとんど完全に改心したかのようである。ディケンズは、少なくともスクルージ自身はそうに思っているという構成にしている。それは少々苦いユーモアの効果を与えると同時に、対照の効果も与えている。すなわち、未来のクリスマスの精霊は、漆黒の闇のようなローブを身にまとい、その手以外を見せることなく、一言も言葉を発しないという不気味な存在であり、優しく柔和な過去の精霊や、豪放磊落な態度で人々に祝福を与える現在の精霊とは全く異なる。しかし、スクルージは精霊の自分に対する善意を信じて疑わない、まるで純真な子供のような態度である。第4章で精霊がスクルージに見せる未来は、彼の死に対する人々の反応と態度である。しかし、スクルージだけがそれが自分の死であることに気づかないという、ある意味で純真さとか誠実さを通り越して、あまりにも健気で人のよい存在になっている。

たとえば、スクルージがよく知っている有力な二人の実業家の会話の中で、「とうとうあのひどい野郎がくたばっちゃまったってね」ということを聞かされたスクルージは、次のように考えるのである。

[Their conversations] could scarcely be supposed to have any bear-

ing on the death of Jacob [Marley], his old partner, for that was Past, and this Ghost's province was the Future. Nor could [Scrooge] think of any one immediately connected with himself, to whom he could apply them. But nothing doubting that to whomsoever they applied they had some latent moral for his own improvement, he resolved to treasure up every word he heard, and everything he saw; and especially to observe *the shadow of himself* when it appeared.

For he had an expectation that the conduct of his future self Would give him the clue he missed, and would render the solution of these riddles easy. (71: my Italics)

しかし、スクルージはこの未来の世界で「自分の影」を見ることはない。彼が見るのは、スクルージが死んだのを笑いの種にしている取引所の連中や、死人からほとんど身ぐるみ剥ぎ取って場末の故売屋に持ち込む家政婦や洗濯婦や葬儀屋であり、スクルージから借金の返済を迫られていた夫婦がその死を喜ぶ情景である。そしてついには、スクルージは、その死んだ人間がベッドのカーテンや毛布まで剥ぎ取られて横たわっている部屋に連れて行かれる。しかし、彼には、いくら精霊にその死者の覆いを取って顔を見ろと、手で指図されても、そうする勇気がない。ただ、「この場を去るにしても、私はこの教訓を忘れはしません。信じて下さい」と言うだけである（*"In leaving it, I shall not leave its lesson, trust me."*(77)）。ティム坊を亡くして悲しみにくれるクラチット家の情景を見せられた後でも、スクルージは精霊に尋ねる。*"Tell me what man that was whom we saw lying dead?"*(81) また、彼が自分の事務所を覗いても、そこには「自分の影」はなく、別の人間の事務所になっている。そしてとうとう精霊は、彼を墓場へと連れていく。ようやく、スクルージにも疑念が起こってくる。彼は、精霊の指さす墓の方へ震えながら這っていき、そこで墓石の名前が自分の名前であることを知り、叫ぶのである。*"Am I that man who lay upon the bed?"*(83)

悔い改めた生き方によって、自分の未来は変わるはずだと信じて疑わなかったスクルージにとって、これは過酷な「試練」である。いわば、ディケンズは、この第4章においてスクルージを真綿で締め付けるように、じわじわと疑心と恐怖を与えるような構成にしているのである。これはきわめて効果的な仕掛けであって、こうした過程を見てはじめて、

最後の場面でのスクルージの必死の訴えが読者に説得力を持つのである。少々長いが、この場面を見てみよう。

'Spirit!' he cried, tight clutching at its robe, 'hear me! I am not the man I was. I will not be the man I must have been but for this intercourse. Why show me this, if I am past all hope?'

For the first time the hand appeared to shake.

'Good Spirit!' he pursued, as down upon the ground he fell before it: 'Your nature intercedes for me, and pities me. Assure me that I yet may change these shadows you have shown me, by an altered life!'

The kind hand trembled.

'I will honour Christmas in my heart, and try to keep it all the year. I will live in the Past, the Present, and the Future. The Spirits of all Three shall strive within me. I will not shut out the lessons that they teach. Oh, tell me I may sponge away the writing on this stone.' (83)

あえて解説する必要もないだろうが、「もし私には希望が残されていないのでしたら、どうしてこんなものを見せるのですか」というスクルージの悲痛な問いかけに、精霊の「手が初めて震えるようにみえた」のである。そして、スクルージが「心を入れかえた生活をすれば、私にはまだ、あなた様が見せた幻影を変えられるかもしれないと請け合ってください」と言うのに対して、精霊の「やさしい手が震える」。未来の精霊がその手によってのみ、未来の影を指し示してきたことを考えると、その手の震えとは、そうした未来の影が動揺し、不確定なものになったことを象徴的に示している。こうして、自分の惨めな死に様を見せつけられ、心の底から悔悟の言葉を叫ぶことで、スクルージにはじめて許しが与えられ、彼は救われるのである。前にも触れたが、第4章における、苦いユーモアや精霊とスクルージの対照的描写は、このクライマックスの場面をより印象的で効果的なものにするための仕掛けとも言えるだろうか。

そして、このような構成によって、この作品はディケンズ流の、「死と再生」の物語になったと言える。さらに、スクルージが「死の苦悶」から最終的に救われることで、またティム坊も救われる（"to Tiny Tim, who did NOT die,[Scrooge] was a second father"(90)）。幼いティムの

子供としての本質が神からの授かりものであるならば ("Spirit of Tiny Tim, thy childish essence was from God!" (81))、スクルージは、精霊たちに導かれた「巡礼」の旅の過程で、ティムの無垢な心を自分のものにする事で、再生することができたとも言えるのである。Malcolm Andrewsは、スクルージは、"rejuvenation"を果たしたのだと指摘するが、それは、むしろ "rebirth" と言うべきものであろう。²²⁾ 救われたスクルージは叫ぶ。 "'I'm quite a boy. Never mind. I don't care. I'd rather be a baby. Hallo! Whoop! Hallo here!'" (85)

しかし、生まれ変わったスクルージは、単純に少年に「若返った」わけではない。彼には、今までの償いをするための時間が与えられるのである ("Best and happiest of all, the Time before him was his own, to make amends in!"(84))。だからこそ、彼はもう一度叫ぶのである。 "'I will live in the Past, the Present, and the Future!'"(84) 過去と向き合い、未来を思いやることで、現実を直視する姿勢が生まれる。現実を直視することは時として辛いものであり、とくに自分の心を深く覗き込み、自分との対話をするということは苦痛でもある。しかし、スクルージは、精霊に強制されたとはこととはいえ、それを体験したのである。²³⁾であればこそ、「償い」は彼にとって過去を取り戻す行為でもあり、同時に未来における変化への希望でもある。こうして、過去、現在、未来は、相互に反響し合う一つの環となるのである。ここにこそ、スクルージの改心の普遍的で、永続的な意味があるのではなかろうか。

注

- 1) John Forster, *The life of Charles Dickens*, 2 vols., ed. A. J. Hoppe (London: J.M. Dent & Sons Ltd., 1980), Vol. , pp. 300-301.
- 2) Forster, Vol. , p. 300 からの引用。
- 3) Michael Pointer によれば、英語圏では、1901年の *Scrooge: or Marley's Ghost*以来、1992年の *The Muppet Christmas Carol* に至るまで、18本の映画が作られ、多くのテレビドラマにもなっている。Michael Pointer, *Charles Dickens on the Screen: The Film, Television, and Video Adaptations* (London: The Scarecrow Press, 1996)
- 4) 北川悌二は、『キャロル』の翻訳の「解説」で次のように指摘している。「この原稿のファクシミリ版をみると、各ページにわたって、消したところ、書きなおしたとこ

ろがじつに多く、その結果、原稿は黒々としたものになり、ディケンズの苦吟のあとがよくうかがえ[る]」。ディケンズ、北川悌二訳、『クリスマス・キャロル』（東京：講談社、1985）、p. 155。See Charles Dickens, *A Christmas Carol: The Original Manuscript* (New York: Dover Publications, 1971)

- 5) Peter Ackroyd, *Dickens* (Harmondsworth: penguin, 1990), p. 437. たしかに、ディケンズのそれまでの作品、*The Pickwick Papers*, *Oliver Twist*, *Nicholas Nickleby*, *Martin Chuzzlewit* などの長編小説はすべて月刊分冊の形で出版されており、ディケンズは読者の反響を見ながら、筋立てを変更することもたびたびあった。
- 6) しかし、J. Hillis Millerは、次のように指摘して、この作品に対する「読み」の多様性について論じている。"It would be possible to argue plausibly that *A Christmas Carol* is an allegory or a parable, or the text for a pantomime, or a conversion narrative, or a dream vision, or a melodrama, or a ghost story, or a Gothick tale, or the text for a dramatic reading or a monologue, all at once." J. Hillis Miller, "The Genres of *A Christmas Carol*," *The Dickensian* 89 (Winter 1993), p. 199.
- 7) Charles Dickens, ed. Ruth Glancy, *A Christmas Carol, in Christmas Books* (Oxford: Oxford University Press, 1988), p. 16. これ以降のこの作品からの引用は、すべてこの版による。
- 8) 田辺昌美、『チャールズ・ディケンズとクリスマス』（京都：あぼろん社、1977）、p. 6。
- 9) Malcolm Andrews, *Dickens and the Grown-up Child* (London: Macmillan, 1994), p. 103.
- 10) 詳しくは、拙稿、「逸脱、そして成長と愛—*Great Expectations*論—」、『沖縄短大論叢』第7巻第1号、1992）を参照。
- 11) "Why do you show me this? A Fourth! Start, Eyes!/What! will the line stretch out to the crack of doom?/ Another yet? A Seventh! I'll see no more:" William Shakespeare, *Macbeth*, Act 3: Scene 4. 12) James E. Marlow, *Charles Dickens: The Uses of Time* (London: Associated University Press, 1994), p. 45.
- 13) この点に関して、田辺昌美の、「実は寓話的な機構というのは実に簡単である。人間の崩壊がことごとく現出されるのと同様、人間復活も事もなく進められはじめるのである」という解釈は、あまりに表面的だと言うほかない。田辺、p. 12。
- 14) フロイトがブロイエルとともに、『ヒステリー現象の心的メカニズム』を発表し、カタルシス法を確立したのが、1893年、ブロイエルとの共著『ヒステリーの研究』で、自由連想法を確立するのが1895年である。「解説」、ジークムント・フロイト、安田徳太郎・安田一郎訳、『精神分析入門』（東京：角川書店、1985）。
- 15) Edgar Johnson, *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*, (New York: Simon and Schuster, 1952), p. 485.

- 16) J. Hillis Miller は次のように指摘している。"The Carol is Dickens's version of the New Testament miracle of the loaves and fishes or of Jesus's parable of the sower..." Miller, p.199.
- 17) 小池滋、『チャールズ・ディケンズ』、(東京：冬樹社、1979)、p. 125。
- 18) この点について、Frances Armstrongは次のように述べている。"That ideal is probably best represented by the Cratchit family at Christmas, a family united against the common enemies of poverty and disease. The scene has become famous not only because readers wanted a sentimental ideal to believe in, a way to perpetuate the best memories of the home of the past, but also because though sentimentally conceived it is realistically described." Frances Armstrong, *Dickens and the Concept of Home*, (Ann Arbor :UMI Research Press, 1990), p. 39.
- 19) マルサスの「余剰人口」という概念は、それこそ"that wicked cant"であるが、人口爆発という事態によって、もうすぐ世界人口が60億人を超える現代にあっては、マルサス批判のもつ意味は、ディケンズの時代よりもはるかに深刻だと言えるかもしれない。なお、マルサスは1820年に、*Principles of Political Economy* を著し、その功利主義的な経済学説はイギリス社会に大きな影響を与えたといわれており、ディケンズのマルサス批判は、その点も含意していると思われる。
- 19) Phillip Collins, 藤村公輝訳、『ディケンズと教育』、(京都：山口書店、1990)、p. 145。
- 21) ディケンズのこの信念が終生変わらなかったことは、後期の*Great Expectations* (1860-61)を読んでも分かる。弁護士JaggersがPipに、Estella をMiss Havishamの養女にした理由を「仮定」という体裁を取りながら話す場面の一部を引用する。"Put the case that he [Jaggers] lived in an atmosphere of evil, and that all he saw of children, was, their being generated in great numbers for certain destruction. Put the case that he often saw children solemnly tried at a criminal bar, where they were held up to be seen; put the case that he habitually knew of their being imprisoned, whipped, transported, neglected, cast out, qualified in all ways for the hangman, and growing up to be hanged." *Great Expectations*, ed. Angus Calder (Harmorndsworth: Penguin, 1981), pp.424-25.
- 22) Andrews, p. 111.
- 23) マーレイの幽霊や3人の精霊をスクルージの意識が外化した存在であると仮定すると、すべてをスクルージの心の中の葛藤のドラマとして考えることもできるし、またそれはスクルージの内的体験ということにもなる。

